小報もがみ　第19号

新型コロナもあり、ひと気のない赤倉温泉街に今日も煌々と明かりが灯る。スナックおどりこに一足踏み入れれば、綺麗に整えられた店内に、あたたかいおしぼり、ママとチーママのおもてなしが心に染みていく。４２年間、どんな想いでこの場所を守り続けてきたのか。いつもは聞き役のママに、夜のカウンター越しでは聞けない話を教えてもらった。

あたしは大阪で生まれて奈良の新庄町ってとこで育ったの。生まれてすぐに父親が亡くなって母子家庭でね。でも母親の再婚相手と合わなくて中学２年の時に家出したのよ。父親は酒乱で、生まれたばかりの妹をボールみたいにぶん投げる人だった。それをキャッチするのが大変だったし、あたしも脱臼させられたりして、唯一の楽しみだった水泳もできなくなって、それで嫌になっちゃって。

それで、もともと日本舞踊やってたから劇団に入って、飯炊きとか師匠の身の回りのことやって生きてきた。１８歳の時に、興行主と全国まわってて、たまたま仙台から上山に向かう時、関山峠が豪雪で通行止めになって。鳴子からまわって行こうと思ったけど、結局足止めくらっちゃって。それで赤倉に泊まったのがきっかけ。当時赤倉にも劇場があったんだけど、辞めるっていう話を聞いて、そこにうちの劇団が入ることになった。あたしは飯炊きだったから、劇場の控室を直して台所にしようと思ったんだけど、えらいお金かかっちゃってね。それでカウンターつけて店をやることになったの。

その２年後、２１歳の時に、興行主が作った借金数千万円を被ることになった。波乱万丈でしょ（笑）。借金払うか、ここを出ていくかの二者択一だったんだけど、すでに付いてくれていたお客さんもいたから離れられなくなった。それに、赤倉という地域だけじゃなくて山形の県民性が好きだったのかもね。素朴で、純粋で、人を信じてくれる。きかないヤンキー上がりの姉ちゃんに見えていただろうあたしを受け入れてくれた。ここで生きていくんだろうなって確信したよね。

家出して、ヤンキーで、結構非行少女に思われるだろうけど、結構硬派で。強いものには向かっていくけど、弱いものには面倒見がいい。自分が食べられなくても「人さ食わせてけったい」って思う。そういうのが結果的に今まで続いてきた理由なのかな。それこそ始めた時は３日で潰れるなんて言われてたけどね（笑）。

人の借金被るっていうのは、人の苦労を被ること。あの当時だったから出来たんだと思うけど。銀行にも友人にも「お前がやってるんだったら」って助けてもらった。中央に出てきても通用するって言われたけど、これまで赤倉捨てられなかったのは、助けてくれた人への恩や、青春時代を過ごした思い出があるからかな。

あたしだって人の借金払ってなかったらこんなボロ屋にしてないわよ。でもね見すぼらしい店内や格好で仕事はできないでしょ。おどりこ高いって言われてるけど、送迎もあって五千円や六千円、どこでも取られる時代。送り迎えも４２年前からしてるわけ。飲酒運転が厳しくなる前から。こんな僻地に奥さん方が送り迎えするのも大変だからね。タクシーも深夜は１台しかなかったから。白タク行為になるのでもちろんノーマネー。来ていただくためには、そういった努力も必要。経費を使わなきゃいけない。

お客様に対する姿勢は誠実でいたいし、来てもらったからには「来て良かった」って思ってもらえる努力はするよね。食べるものにしても手は抜かないし、ちょっとしたものだけど、お土産持って帰ってもらったり。モノで釣るわけじゃないけど、人の気持ちって腹かっちゃばいて見せらんねから。

うちに来て、これでもかっていうくらいお客さんをおもてなしするのは、また来てもらいたいってこともあるけど、赤倉温泉に来てもらいたいから。うち一軒だけ儲かってたんでは絶対ダメ。他のお店があるからやっていける。一軒でも電気消えると寂しいし、そうなると人って歩かなくなるから。

自分が病気だろうと、必ず１日１回ここに来ないとダメなのよ。お客さんいるいない関わらず。まるっきり見えないところで休むってことができない。だから休みの日はない。コロナもあるし、お客さんがいない時もあるよ。でもやっぱりここに来たくなる。

自分の人生が赤倉だったんだな。「何なんず」って思ったこともたくさんある。でも、みんな飲み込んできちゃった。思い出すと悔しいこととか悲しいこともたくさんあったけど、ここは自分の城だから。

長年店開けて、家族４代で来てくれる人たちもいる。孫まで来るってこともあるから、下手すりゃ５代だよね。でも歴史にとらわれずね。風が通らないところは腐敗するから。だから１日でも閉めたいと思ったことはない。建物も住まなくなって空き家になれば腐るし、風が止まったら人間も町も腐るんだよ。吹く風だけじゃなくてさ。人の気みたいなものかな。あたしも風に呼び起こされてここに来たのかもしれないね。

2021年6月23日発行
編集：最上町地域おこし協力隊 山﨑香菜子
情報提供や山﨑とお話したい方はご連絡ください
電話0233-43-2261（最上町役場まちづくり推進室）
メールhayakawamiyage@gmail.com